

詠む広場

毎日歌壇

何人で見てもひとりの海だろ う それぞれの
持つ死から覗けば 川崎市 二宮 珊瑚
△評▽すべての生命の源である海とはすな
わち大いなる死。それぞれの小さな死から
のぞけば。
使わない望遠鏡を抱きしめて銃に似ているこ
とがつかない 明石市 石村 まい
△評▽望遠鏡が銃に似ていること。どちら
も永遠を知らずとする。
秋蝶に触るものなほ触れたらば光の中に
ヴァイオリン凍つ 東京 吉岡 耕大
狂うことも狂わぬこともゆるされて皺の隙ま
で満ちる月光 東京 境 千尋
異国語をきみは愛したこの惑星にない顔料に
焦がれるように 横浜市 街川 二級
ティーカップの中はひとつの死後だから二ルギ
リ骸のように浮かぶよ 国立市 蔵 井
その風はほくろの声そのものであり彩色硝子の
窓を叩いた さいたま市 雨谷 詩穂
陶酔の眸が近づくと花びらの散り初めて私は花
なのかも 甲府市 村田 一広
声もなく泣くひとの背をさするとき茉莉花な
どのはつかぬ 東京 山野ゆかり
星月夜 卵を受けるてのひらはたましいに触
れてしまつたためらい 宝塚市 白川 楼瑠

青春が戦時になると知らないで生まれた姉は
今年百歳 川西市 波 高し
△評▽今年が100歳なら、昭和初めの生
まれ。戦時下に青春を過ごすなど苦難の
姉の人生を深く思いやる作である。
戦争があったがために俺がいる負傷兵の父と
看護婦の母と 春日市 伊藤 亮
△評▽戦争は絶対悪だが、戦時下にも人生
のドラマが生まれる。「亮」は明るさの意。
沈黙の言葉をそと聴きとめるあなたは遠き
星を読むひと 所沢市 里見 脩一
猛暑日のミストのように刹那でも人に寄り添
う優しさが欲しい 長崎市 田中 正和
歯を削る音のあいまに聞こえる医療用品不
足の会話 東京 奥山いづみ
コロナ禍の面会できぬ間支えくれし友の数通
遺品の中から 富田林市 小林 元子
本心にどうしていいか恐怖です何度も侵入被
害を受けて 秦野市 諸星 一枝
カトマンズからやって来た転校生めだかに瞳
輝かせせり 兵庫 今野 浮世
冷蔵庫みんな逃げ込め夏休み都から来た鳩サ
プレーも 福津市 原田 冬
茹だる日に塩に代え柿の種 麦酒の泡で喉
へ流しぬ 岡山市 佐藤結太郎

聡明な林檎もいつか朽ちていく光待ちわぶせ
ザンヌの影 川崎市 新井 将
△評▽多くのリンゴの絵で知られるザン
ヌ。果実の有限の時間を光と影のうちに閉
じ込めようとした。1、4句も巧みだ。
なあちゃんは目の丸おっ立って三輪車みちゃんち
まで……戦死したらし 彦根市 森本 純
△評▽戦時下の「なあちゃん」の短い一生。
第2句のアクの強い言い方が印象的。
人かげを母と決めつけ子牛起乳首もとめて
走り寄りたり 水戸市 山口 康彦
柏手を打つがごとくに蚊を捕りぬ祖母、祖父、
父と夫を看取った手 由利本荘市 佐々木静江
お気遣いバツイチなどと言われたくない私は
マルだと信じてるから 東京 鈴木真理子
見上げればすべての星に名があつて希望か絶
望かはわからない 東京 石川 真琴
この街の文房具屋が消えていた施設へ行った
と子供らの声 日南市 宮田 隆雄
AIの声の権利の侵害を問えばAI膨れて黙
る セルフレススマホ注文ネット予約父の不安を
笑えなくなる 久留米市 春日 登
読経があなたの胸に沁みたら戻っておいで
いつもの場所に 豊中市 谷口 眞翠

介護終え一時の幸やゆつくりと蟬声聞きてコ
カコーラ飲む 須崎市 野中 泰佑
△評▽介護の後の休憩時間である。また仕
事に戻るのだ。「蟬声」の季節感が良い。
コカコーラに現実感がある。聴覚と味覚だ。
ほとんどの改革は無駄な店も店のレイア
ウト変えやがって 広島市 堀 眞希
△評▽レイアウトの変更も改革の一つなの
である。荒っぽい口語にパワーがある。
誰しもが生き急ぐ夜の片隅にエンドロールを
終りまで観る 横濱市 井上 登
触れることなど許されぬその背中あなたの海
は誰かに揺れる 北九州市 もりともみち
君の手がわたしの髪に触れるとき遠い牧場の
馬が眠った 名古屋 森本 有
少年は老人になった 長ーいエスカレータ
ーを降りるあいだに 大野城市 野分 のわ
しあわせと言えはしあわせ浴槽で自分の声を
たしかめている 津市 川原田明子
身勝手に生きたり死んでみたりしてゲームの
きみが跳ね返ってくる 大津市 世田 夏雪
ここしか会わないともだちだつてと棒付きキャ
ンディーなめてわすれよ。守口市 寺前 晴
たればが積もり積もって雨になる あなたは
すこし寝たほうがいい 藤沢市 りつとゆき

水原 紫苑選

伊藤 一彦選

米川千嘉子選

加藤 治郎選

青森市 小山内豊彦
少年のやうな笑顔やソーダ水
東京 小栗しづゑ
万緑の湖底横たふ朽木あり
鎌ヶ谷市 佐藤 紀子
紫陽花の咲き満つる頃生まれ来し
生駒市 浦城 博子
石垣に口の裂けた蛇の衣
朝倉市 鳥井てんせき
戦争のニュースとたえず終戦日
相模原市 小山 鞠子
一丁目のバス停百日紅
兵庫 廣澤 真希
その下は平らかな湖夏の雲
浜松市 久野 茂樹

東京 石橋万喜子
客去りてまだ湯のたぎりを夏燗
和歌山市 曾根 澄子
踏切の前に増えゆく日傘かな
東京 石川 昇
サングラス外して笑顔近づき来
加古川市 中村 立身
汗のシャツ脱ぐに幼な手を借りて
越前市 加藤 隆規
盆踊り一しかけて輪の中へ
越谷市 新井高四郎
岩陰のいつもの場所へ夜釣人
和歌山 馬谷富貴子
目覚めればゆめのつぎの蟬時雨
神戸市 大田 雅一

徳島 坂尾 怪生
真白なる聖母の手筆朝涼し
佐佐保市 相川 正敏
掃苔や空調服のモーター音
下関市 磯部 秀幸
病室に西日が長く射しにけり
札幌市 若林 陽光
旧道に残る旅籠や水を打つ
盛岡市 舟山 治男
昼寝して目覚めれば空晴れわたり
所沢市 白川真記子
梅雨明けや爛り続ける中華鍋
堺市 佐々木正二郎
ぐい呑みの青竹香る冷し酒
和泉市 杉崎 利雄

秦野市 林 ち島
憤ましき通夜の一間の蚊遣書
志木市 谷村 康志
噴水や人去りてより尚高く
東京 森 一寒
朝霧にぬれて黒牛長腿毛
常陸大宮市 笹沼 實
山からの川からの風簾寝椅子
飯塚市 倉田 幸男
打水のゆきわたりたる祇園町
東京 徳原 伸吉
鳴砂をゆつくり歩く夜の秋
岸和田市 妙中 正
京は宿浪速は船の祭鯉
浜松市 宮田 久常

取り合わせる季語を「原爆忌」ではなく
「広島忌」にしたのは、上五中七が朝のや
りとどたと伝えるためでしょうか。あるい
は「広島忌」を夏の季語と捉え、夏の句と
して詠んだのかもしれない。広島市に原
子爆弾が投下されたのは、1945年8月
6日午前8時15分頃。快晴で、気温はぐん
ぐん上昇していたといわれます。
同7時9分に出された警戒警報は22分後
には解除され、人々は掲句のようにそれぞ
れの日を始めるようしていました。突然
襲ってくる「新型爆弾」に町も日常も一瞬
で破壊され、多くの犠牲者が出てしまつこ
となど誰が想像できたでしょうか。改めて、
あたりまえの日々のありがたさを感じま
す。(えんどう・みか俳人)

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます

気になる3句

掘り鉄の腹這ひになる夏野原
推敲の指を折りたり夕端居
八月だ岡本太郎だギラギラだ

ひめさゆ
水芭
立春の

6代目 毎日が充実! 脳血管 隠れ 脳血管 血管力を強 骨粗しょう症 一生歩く! 知っておきたい 手間をかけずに絶 きくち